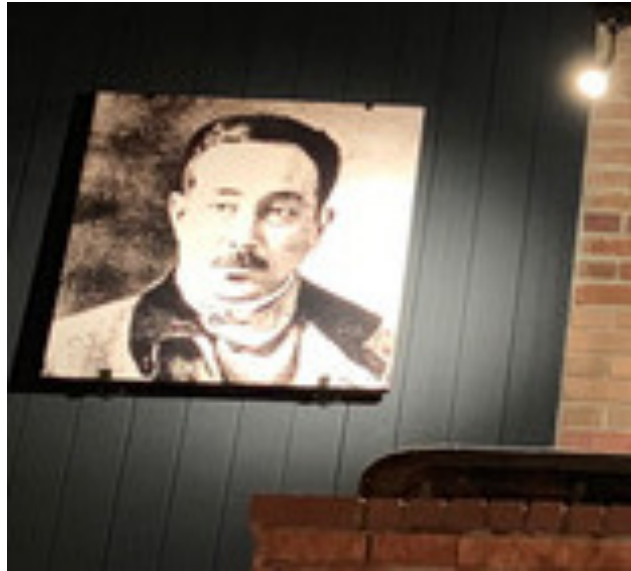


土香る会

読書会感想文集 Vol.39



2021年12月

【目次】

第42回読書会(2021.12.18)
有島武郎『小さき影』・・・P1～

※ 土香る会が毎月行っている「読書会」に参加した方々が寄せた、感想文と報告を掲載しています。

Vol.29からは、有島武郎の作品でまだ読んでいなかった小説の読書会、
いわば第4シリーズの読書会感想文集となりました。

● 問合せ先／土香る会事務局(有島記念館内)0136-44-3245

第42回読書会のまとめ

『小さき影』

2021年12月18日

参加4名+Zoom参加1名 感想文提出7名（うち感想文のみ3名）

1. 作品の題名

題名が意味するものは何かと考えた人がいました。タイトルをテーマにして書いた感想文であり、こういう展開の仕方もあるのかという感想がありました。「小さき影」は子供たちではなく亡妻ではないかとの解釈でしたが、その結論に向かって構成が出来ていて分かりやすい展開だったという感想もありました。一つの感想文に一つのテーマというのが分かりやすいという意見も出ました。

以上とは別に、「小さき影」は「私」と子供たちを覆う不幸のことだと解釈した人もいました。

2. 作品の冒頭と最後

冒頭「誰にあてるともなく」と最後「子供達の母なる『お前』にあてよう」が呼応していることに着目した感想がありました。そこには妻に対する有島の複雑な気持ちが出ていると言います。一つは妻の心を救うことができなかつた悔恨。もう一つは文学への止み難い希求が妻の不在をすら願ったという自らに対する嫌悪です。そこにはありのままの自分とはどのような人間かと自問する有島の姿が浮かんできます。そしてこの問いこそ有島が作品の中で追求しても答が出ず、もがき苦しんだ根源ではないかと続けました。

話し合いの中で、今回の作品は子供たちを通して妻を考え、亡妻を媒介として自分について考えた入れ子細工のような構造であり、また、自分とは何者かというテーマを考えた最後の作品だとの指摘が出されました。

また、冒頭の一行が有島自身の最期へとつながる序章のように響くという感想がありました。死ぬと分かっているからこの作品を書いているのかと思ったそうです。子供達と別れを惜しんでいるような、まるで死ぬ直前に書いているように感じたという感想もあり、素晴らしい直感だとの発言がありました。死に関する発言が続きますが、有島は常に自分の最期を考えるのが身についていたのではないかと感想もありました。

3. 作品の読み方

有島と共通する部分があると分かったからますます深入りしていつている。共感部分が多くてどんどん読んでいくタイプだと自分では思うという分析がありました。読書会で取り上げている作品以外の評論、私信や日記などを多く読んでから言える感想もあるという意見に対しても、読んでいくうちに一つのテーマが浮かび上がってくる。何故と考えると自分の中にそういう意識があったし、自分の生き方を考えてしまうと率直な心情が出されました。

精神分析論的な読み方だと思ふとか、客観的よりも主観的な読み方だと思ふなどの意見が出たあとで、有島を介して自分を分析しているのではという問いに対して、人を介して自分が分かるので

あって自分を介しては自分は分からないという名言が出ました。

4. 作家の心理と存在意義

自分の心理状態を言葉でなぞっていくのは結構きついと思うが、それが作家活動の意味なのかもしれないという意見がありました。当の作家は大変だろうが、作品として残ることで後々私達はその作家の心中を窺い知ることができるという意見も。昔と今、今と未来。生きている時代が違う人たちが考えに共感し、また、考えを共有する話はこのあともシリウス星のところで出てきます。

5. 集団と個人

自分が乗ったタクシーを取り囲む人々が木偶のように見えた場面からの連想で、都会にある全国展開のコーヒー店のカウンター席に座って窓外の人波を見ている時に、似たような感覚を抱いたという感想がありました。これに対して、逆に、通りかかった人がコーヒー店のカウンター席に座って外を眺めている人を見ても同じ感覚になるのではという意見があり、そう言えばそうだとどちらも成り立つ不思議を皆が感じているようでした。

また、駅のベンチにいる時が一番よく考え事ができるとか、読書に集中できるという話が出ました。コーヒー店のカウンター席でのことを併せると、隣に人がいるにも拘わらず一人の自分を意識してほっとして、かえって安らぐこともあるとの感想が出ています。ほっとできる機会があるのが都会なのか、田舎だとそうはいかないのか、中々面白いテーマです。

6. 冬のシリウス星が語るもの

作品は夏を描いていますが、冬の大三角を形作るシリウスが見えた人がいました。これは、絵のように、また、ドラマのように書かれた感想文だと好評でした。私たちに見えているシリウスの光は約8年前のものだそうですが、シリウス自体は実は消滅しかかっているらしいので光は見えても実際に存在しているのかどうかははっきりしません。そのことと有島がいない今、私たちが彼の作品を読んでいることを重ねて考えてしまうのだそうです。時空を超えた面白い発想です。

7. 白樺派とロダンの彫刻

ロダンに寄り道をした人もいました。白樺派の人たちがロダンに浮世絵を贈り、そのお礼にとロダンは小さな彫刻を3つ作ってくれたとか。その一つに「或る小さき影」と題するものがあったそうです。有島も当然観ているはずですが、何と有島をふくめ3人が『小さき影』という名の著作をものしているという情報がありました。有島は果たしてロダンの彫刻に触発されてこの作品を書いたのでしょうか。それらしい臭いはするのですが、決定的な証拠がないそうです。

別の人からは、有島が明らかにロダンに影響されて書いたと読める感想文が出されています。

8. 誰も気付かなかった読み方

8回連載もので新聞に書いたその一回ごとにテーマを探し出す読み方がありました。それらをま

とめて一言で言うと、有島は他人との人間関係形成で明らかにつまずいていることになるようです。

例えば、主人公と子供たちの間には対話未満の一方通行の関係が常態化しているとか、女中たちとの間にも一方通行の関係が現れるとか、妹家族と会っていても会話のことが書いてないなどです。精神医学を借りて離人感という言葉も出ています。子供たちに関しては、結果として子供たちは次第に置き去りにされ、「私」の密かな子捨てが始まり、子供たちが味わう不幸が深まっていくという過激な言葉も出てきます。是非感想文をお読みになって下さい。 (文責:井上剛)

※参加者：井上剛、梅田滋、菊地寛(ZOOM)、高木直良、藤波ひとみ(五十音順)

※感想文のみ参加：磯野浩昭、磯野美和、玉田茂喜

※以下感想文の掲載順は、概ね当日の発表順です。

「小さき影」という題名が示すものは何か又は何者か、というのが今回の感想文のテーマである。子供たちを指していると考えられようが、それ以外の解釈はないのかという問いかけをしたい。

妻の三周忌を軽井沢の別荘で三人の子供と過ごしたその前後の日常の出来事を、誰に宛てるともなく私信として書き連ねたというこの作品を幾度も読み返して、気になるところが3か所あった。いずれも有島の心中を覗かせてくれている部分だ。

(その1)

東京へ帰る夜中の汽車を待つ間に、妻が残した「松虫」を知らず知らず読み進めていったところ、妻が六歳くらいの時の写真が出てきた。

嘗てこんなとんきよな顔をして、頭をおかっぱにした童女がたしかに此世に生きていた事があるのだ。而してその童女は今は何処を探してもいないのだ。何の為に生きて来たのだ。何の為に死んだのだ。少しも分からない。そんな事を思っている私は一体何だ。私はその写真の顔をじっと見詰めている中に、ぞっとする程気味悪く恐ろしくなって来た。自分自身や自分を囲む世界がずっと私から離れて行くように思えた。(p536 5～9行目)

「何の為に生きて来たのだ。何の為に死んだのだ」と問うても答えはないし、問われても答えることはできない。それは人が決めることではないからだ。多く的人是天の采配だとぼんやりと想像しており、問うことがあったとしても突き詰めて問うまでは至らない。有島は、そうではない哲学者や宗教家のような少数派に含まれるのだろう。ひょっとすると人ではない、現世ではないものを見たり感じたりする能力があったのかもしれない。最後の一文「自分自身を囲む世界がずっと私から離れて行くように思えた」というのはそういうことなのではないか。

(その2)

上野停車場に着いてタクシーを頼み、やっと来た一台に義弟と乗り込み出発した方がいいが、突然車が動かなくなる。運転手が原因を調べるべく奮闘している間に往来の人が車の周囲を取り囲むが、車中にいた有島は妙な光景を見ることになる。

私はその時頭がかんとしたように思った。車外に立つどの顔もどの顔も木偶のようだった。それが口を開き、顔をゆがめて、物をいったり笑ったりしていた。車窓を隔てている為に、声が少しも聞こえないので、殊更私の感じを不思議なものにしていた。私は人々に囲まれながら、広野の真ん中にたった一人ぼっちで立つ人のように思った。普段は人事という習慣に紛れて見つめもしない

でいた人間生活の実相が、まざまざと私の前に立ち現れたのを私は感じた。本当は誰でも孤独なのだ。一人坊っちなのだ。強いてそれをまぎらす為に私達は憎んで見たり愛して見たりして、本当の人の姿から間に合わせに遁れようとしているのだ。私はそんなことをぼんやりした頭で考えていた。こんな孤独な中において、しっかり生命の道を踏みしめて行く人はどれ程悲しいだろう。(p541 2～8行目)

車窓を隔てているためか人々の声が全く聞こえない。周りに人が一杯いるのに広野の真ん中に一人で立っているように感じた。周囲の音がたまたま聞こえなかったので広野に一人立つ如く感じたが、実は声が聞こえていても誰もが広野の一人なのではないかと言いたそう。人は自分が広野の一人であることを知ってしまう怖さから無意識に離れようとして、自分以外の人を憎んだり愛したりなどするのではないかと有島は気付く。それは妻の死によって「生まれる時も一人、死ぬ時も一人」であることを分からせられたから、かもしれない。

孤独な人が、自分は孤独だと認め、死ぬまで孤独と道連れで生きていくのは考えられない程に悲しいことだと有島は言う。実感かもしれないが、同時にそのことを共有できる人を求めてもいたのではないか。妻が唯一人有島と共有できる人であったかどうかは分からないが、亡くなってしまえば共有は叶わない。共有できていた時期があったと思えば、存在がなくなって余計に悲しき、淋しさが身に沁みるだろう。

(その3)

自宅に戻ると母親が入れ替わって孫たちの面倒を見るために別荘へ出かけて行った。一人になってやっと安心し、気がかりだった仕事に取り掛かったが、思わぬ事態が起こった。

暫くして私はぎょっと物音に驚かされて机から上体を立て直した。夏の日には光の津波のように一時に瞳孔に押し寄せて来るので眼も開けなかった。寝不足にまけ、暑さにまけ、焦慮にまけて私は何時の間にか仮寝(うたたね)をしていたのだ。額にも、胸にも、背にも、脇の下にも、膝の裏にも、濃い脂汗が気味悪くにじみ出していた。

誰を責めよう。私は自分に呆れ果てていた。少しばかりの眠りであったが、私の頭は急に明瞭過ぎる程明瞭になって、私を苦しめた。

私の眼からは本当に苦しい涙が流れた。

私にはもう書く事がない。眼を覚ましてから私が書きつけておく事は是れだけで沢山だ。私は誰にあてるともなくこの私信を書いた。書いてしまったから誰にあてたものかと思案して見た。

そう。この私信は矢張り私の子供達の母なる「お前」にあてよう。謎のようなこんな文句を私の他に私らしく理解するのは「お前」位なものだろうから。(p541 後ろから3行目～p542 最後)

寝不足、暑さ、焦りに負けて仮寝をしていたことで有島は愕然となる。自分に呆れ果て、苦しい涙を流すことになった。そして思案した挙げ句、あの世にいる妻に宛てることにしたのは、「謎の

ようなこんな文句」を「私の他に私らしく理解する」のは赤の他人ではなく、第二の自分たる妻しかいないだろうと思うからだ。

では、「こんな文句」とは何なのか？ 2つ考えてみた。一つは、「文句」を不平、不満、不賛成などの言い分と考えた。具体的には、子供達のことから時間とエネルギーを取られ、本来の物書き作業に集中できないことからくる苛立ちや焦り、誰にも頼ることのできない孤独感や、誰も分かってくれないという疎外感などではないかと思う。

もう一つは、「文句」を幾つかの語が続いた語句と考えた。具体的には直前に出てくる「私の子供達の母なる『お前』」を指すというもので、「こんな文句」の前に「謎のような」という形容がついていることがヒントになる。「私の妻たる『お前』」と言えば済むのにわざとひねった言い方になっているのは妻が亡くなっているからだろう。今となっては私だけの子供達になっているが元々妻の子供達でもあったのだから、私信を書いて妻に子供達の日常の様子を知ってもらおうという気持ちだったように思った。

子供達の日々の面倒はできる限り見ようと思っているが、仕事との兼ね合いもあり自分の中で折り合いをつけるのが難しい。そんな苦勞への不平、不満を洩らす相手がいなくなったので、子供達の様子と併せて自分の様子も妻に知ってもらい、あの世から苦笑いでもしながら、自分の今の立場を理解し慰めてくれることを期待したようにも感じた。

さて最後に、冒頭に書いた私のテーマに戻ってみる。「小さき影」とは何者か？ 多くの人は三人の子供と考えるだろうが、私は「亡き妻」ではないかと考えてみた。

「影」というのは「陰」を連想させ、亡くなった妻を指すことに納得しやすい。むしろ子供達を影という方が私は理解しにくいように思う。

では「小さき」は何故か？ 妻の存在は、生前はもとより死後であっても有島の中ではとても大きなものであるだろう。だからといって「大きな」と言えばそれは自分の中だけの話になってしまう。亡妻は自分以外のほとんどの人にとっては記憶からも薄れ、遠い存在だ。いや自分にとっても近い将来、記憶から遠くなってしまおうと予感しているはずだ。心の中を占めていた「大きな」影もやがて「小さき」影になってしまうだろう。しかし小さくなくても無になりはしない。自分の中にある、現世とは違う世界で、妻は確かに存在するのだ。この世ならざるものを感知する有島ならありうる話だという気がする。

有島読書ノート 38：深く恐ろしい作品～『小さき影』

Ums.

この作品については、二度目の感想文である。

一見ほのぼのとした描写に思える情景の中に、作者の暗い闇が問わず語りに顔を出しているように読めたのは、数年前の初読の感想と基本的には同じである。しかし、初読時に感じた象徴的なニュアンスが、今回読み直してみて、作品全体に巧妙に埋め込まれていることに気づいた。これは、この時期の（T8）有島武郎の、内面描写の筆力の確かさに負うところも大きいと思う。

そのような文章表現のニュアンスのヒダに、分け入ってみよう。

作品の冒頭は、次のように始まる。

「誰にあてるともなくこの私信を書き連ねて見る」(P531)

そして、最後は次のように結ばれる。

「さうだ。この私信は矢張り私の子供達の母なる「お前」にあてよう。謎のやうなこんな文句を私の他に私らしく理解するのは「お前」位なものだらうから」(P542)

この呼応構造が、この作品の成り立ちと行末を象徴的に物語っている。

まず、この作品は亡き妻以外の誰も理解してくれない真意を秘めていると告白していることに注目すべきだろう。この謎かけには、二つの問いが仕掛けられている。

一つは、理解してくれそうなのがなぜ亡き妻だけなのか、という問い。

もう一つは、理解されにくい内容とはどんなことなのか、という問い。

この二つの問いに導かれるように、この作品の随所に潜む謎解きのヒントを読み込んでみよう。

「母のない子のさういふはしゃいだ様子を見ていると、それは人を喜ばせるよりも悲しくさせる。彼等の一挙一動を慈愛をこめてまじろぎもせず見守る眼を運命の眼の他に彼等は持たないからだ。而して運命の眼は、何時出来心で残忍な眼に変わらないかを誰が知り得よう。」(P531)

亡き妻が遺した三人の小さき子らの無邪気な様子は、その母の死と必ず結びついて受け止められることであり、母の死が招いた過酷な運命がその子らにさらに残酷な運命を課す可能性もあるということを示唆している。3人の小さき子らの描写は、死んだ妻を作者に想起させる重要な役割を担っている。

「ここで私は彼等と共にその母の三周忌を迎えた。私達は格別の設けもしなかった。子供達は終日を事もなげに遊び暮らした。その夕方偶然な事で私達四人は揃って写真を撮って貰う機会が与えられた。そんな事が私には不思議に考られる程その一日は事なく暮た。」(P531-532)

妻の死を強く想起させる機会の一つ「三周忌」を殊更に自他へ訴えるつもりがなかったことは、妻の死をきっかけに妻の死を踏み越えて新たな世界に赴こうとする、主人公にとっての強い内的動機を示唆している。

それはどのようなことか？

「かうして暮らしていくのは悪くはなかった。然し私は段々やきもきし出した。K駅に来てから私はもう二十日の餘を過ごしていた。気分が纏まらないためにこれと云ってする仕事もなく一日一日を無駄に肥りながら送っていく事が如何しても堪えられなくなった」(P532)

「私はすぐその前後の一時七分の汽車で帰る決心をしてしまった。母は十三日の夜か十四日の朝でなければK駅には着き得ない。その間子供達を女中の手ばかりに任せておくのは可哀想でも、心配でもあったが、私の逸る心はそんな事をかまっていられなかった。それ程私は気忙しくなっていた。」(P532)

主人公の脳裏には、亡き妻のことやその子らのこと以上に自らに迫ってくる、ある想いがあつた。そして結局、彼は自らの仕事を優先する選択に追い込まれていった。この葛藤は、ある意味で通常よくあることであろう。

「夕餉を仕舞ってから行夫は段々不安そうな顔を始めた。・・(略)・・久し振で私と一緒に湯をつかった彼等は、湯殿一杯水だらけにしてふざけ廻した。然しその中にもどこか三人の心には淋しそうな處が見えた。それは私の心が移るのかも知れないと思うと私はわざと平気を装って見せた。・・(略)・・それでも私達は妙にはづまなかった。」(P533)

しかし、主人公の心の中では葛藤が完全に決着することなく続いている。子供たちの不安は主人公の不安でもあつた。自分が決めた方針が、子供たちの微妙な反応を介して、自分自身をも苛む。

「私は耳を澄まして三人の聲を懐かしいもののように聞いていた。乳母がなだめあぐんでいるのを歯痒くさえ思っていた。而して仕舞いには哀れになって、二階に上って行って三人の間に我が身を横へた。乳母は黙ったまま降りて行った」(P535)

彼は、自らの葛藤が激しくなっていくのを感じる。それは子供への愛情によって掻き立てられたもののように見えて、実は微妙に違う。それは、子供を介してその不在を感じざるを得ない亡き妻への想いであり、亡き妻への想いが彼にその意味するところを呼び起こすものであつた。「懐かし

いものように聞いていた。」を、私はそのように読んだ。

「で、汽車を待つ間に読みさしのメレジコフスキーの「先駆者」でも讀もうとして包みを開くと、その中から「松蟲」が出てきた。・・(略)・・而して知らず知らず一頁一頁と読んで行った」
(P536)

主人公は、自分の時間を取り戻して仕事に復帰する過程で、予期せずに亡き妻の著書に再会した。作者の意図が、主人公を不意に襲ったこの展開に込められている。妻のかつての存在と、今の不在の意味を、主人公は自らに問い詰めようとする。

「而してその童女は今は何処を探してもいないのだ。何の為に生きて来たのだ。何の為に死んだのだ。少しも分からない。そんなことを思っている私は一体何だ。私はその写真の顔をじっと見詰めている中に、ぞっとする程薄気味悪く恐ろしくなって来た。自分自身や自分を囲む世界がずっと私から離れて行くやうに思へた」 (P536)

この作品の最も奥底深いところに漂っている作者の虚無感を、端的に表現している部分である。その虚無感というのは、妻の死、不在ということを想起させた彼女の若い頃の写真が引き出したものであり、主人公自身の「死」そのものへも想起の闇が深まって行ったことによる一種の「疎外感」がもたらしたものであった。とは云っても、その「死」そのものは、宗教的であったり哲学的であったりするような観念や抽象のものではなく、あくまでも、妻の死に固着したものであるが故に、妻の死と自分のありようを結びつけずにはおかない主人公の虚無感をここでは表出している、と読むべきだろう。

ここが、この作品のコアであると思われる。

「私の眼はひとりでに涙に潤った」 (P536)

「稲妻もしなくなった大空は、雲間に星を連ねて重々しく動きながら、地平線から私の頭の上まで広がっていた。あそこの世界・・・ここの世界」 (P537)

彼の虚無感がもたらした涙は、妻がいる「あそこの世界」と子供や自分がいる「ここの世界」を広く深く包み込んでいる重層的な深層世界による啓示の証であっただろう。この啓示の意味を手繰り始めた主人公は、突如その手がかりともなるある事象に出会い、驚く。

「突然私の耳に憚るやうに「パパパ・・・」と云ふ行夫の聲を捕らえて、ぎょっと正気に返った。その聲は確かに二階から響いて来た。それを聞くと私はふるひつくやうな執着を感じて、出来るだけやさしく「はいよ」といらへながら、硝子戸を急ぎながらそーっと開けて二階に上がって見た」
(P537)

行夫の聲は、亡き妻と主人公の歴史と現状を子どもの心の中で結びつけるものであったが故に、主人公は自身が彷徨っていた虚無感から一瞬にして子どもの実世界に帰還できた。しかし、その正気への帰還が、なぜ「ぎょっと」する意識の落差を招いたのだろうか。

「「パパもっと真中に寝てもいいの・・・」と訳の分からない事をいふかと思ふと、もうそのままやすやすと寝入ってしまった。私はその側に横になったまま黙ってその寝顔を見守っていた」(P537)

行夫の寝言を「訳の分からない事をいふ」と書いているが、実はこの作品の本質に触れる暗喩を隠している箇所であり、用意周到なフェイントをかけた表現である。

「パパもっと真中に」という言葉は、主人公が亡き妻と遺児三人の存在の意味について触れる作品を描くべき立場にある、という自己規定を暗示している。そのことを、子どもの寝言から諭されたというのが、「ぎょっと」した理由である。子どもの言葉から、妻の死の意味を示唆されたというのである。いや、妻の死の意味を深く考えるように示唆された、というべきかも知れない。このことは、以前にも、『フランセスの顔』(T5)、『死と其前後』(T6)、『平凡人の手紙』(T6)、『実験室』(T6)、『小さき者へ』(T7) など、この時期に集中して描かれた作品の中に一貫して流れるテーマとして読み取る事ができる。これらの作品群の延長に、この作品『小さき影』(T8)も位置している。

「人々の間からは睦じそうに笑ひ聲などが聞こえた。私は黙ってそれを見守った」(P538)

主人公は、義弟の家族の様子を描きながら、自身の家族に間接的な光を当てている。そして、その相違は主人公自身の内面の葛藤に起因するものであり、その葛藤は、自身の虚無感の原因となっている妻の死の意味を、子どもたちの存在を介して意識の表面に呼び覚ましている。

「私は自分のした事を悔むやうな心持ちになって、東京の土を激しく踏みながらあちこちと歩いた」(P540)

残された子どもの気持ちよりも東京で再開したい仕事を優先するよう選択した自分の判断に深刻な誤りがあった事を直感した主人公は、自分の仕事が待っている東京がいつの間にか忌まわしいものに思われてきた。それは、自分の作品が妻の死や子どもたちの存在をきちんと受け止めたものになっているのだろうか、という不安を抱え込むことになったからだろう。

「寝不足な私の頭は妙にぼんやりして、はっきりものを考える力を失ったやうに、窓から見える町々の印象を取入れた。取り入れられた印象は恐ろしく現実的なものになったり、痛く夢幻的なものになったりして、縮まったり膨れたりした。」(P540)

「私はその時頭がか一んとしたやうに思った。車外に立つどの顔もどの顔も木偶のやうだった。それが口を開き、顔をゆがめて、物をいったり笑ったりしていた。・・・中略・・・私は人々に囲まれながら、曠野の真中にたった一人坊ちで立つ人のやうに思った。普段は人事といふ習慣に紛れて見つめもしないでいた人間生活の実相が、まざまざと私の前に立ち現れたのを私は感じた。本統は誰でも孤独なのだ。一人坊ちなのだ。強てもそれをまぎらす為に私たちは憎んでみたり愛してみたりして、本統の人の姿から間に合わせに逃れようとしているのだ。私はそんなことをぼんやりした頭で考えていた。こんな孤独な中において、しっかりと生命の道を踏みしめて行く人はどれほど悲しいだろう。」(P541)

主人公が焦って仕事に戻った東京で彼を待ち構えていたのは、想像すらしていなかった疎外感と孤独感であった。しかも、それは彼のみを襲う周辺社会からの圧力ではなく、周辺の人々一人一人も取り憑かれている、生きることそのものに不可避の如き疎外感と孤独感であった。

彼自身にとっては、仕事への焦りから子どもとの時間も蔑ろにしてしまうそんな自らに対する自己嫌悪によるものでもあっただろうが、それが彼一人だけの罪と罰ではなく、もっと奥深く普遍的な、人間存在そのものにまわりつく宿命のようなものであると、主人公は感じたのである。

したがって、「こんな孤独な中において、しっかりと生命の道を踏みしめて行く人はどれほど悲しいだろう」という感慨は、生きて行く上で避けられない孤独を意識的に担い貫こうとする覚悟の手前で抱え込んだ、最後の躊躇を表白したものである。

それは、彼のどのような状況を指しているのだろうか。

その悲しみとは、いったいどのようなことなのだろうか。

「誰を責めよう。私は自分に呆れ果てていた。少しばかりの眠りであったが、私の頭は急に明瞭すぎるほど明瞭になって、私を苦しめた。

私の眼からは本統に苦しい涙が流れた。

私にはもう書く事がない。眼を覚ましてから私が書き付けておくことは是だけで沢山だ。私はだれにあてるともなくこの私信を書いた。書いてしまってから誰にあてたものかと思案してみた」(P542)

主人公、いや、もはやここに至って、著者有島武郎は、と言い切りたい。

この作品の中で、武郎はどのような孤独感と悲しみで自身の虚無感を苛んでいたのだろうか。

武郎は、妻安子が死に至った背景は自分が余儀なくしたものである、と自らを苛んでいた。

それは二重の意味で、安子を死に追いやったのは自分だという自己断罪であったろう。

一つは、彼女が心そのままに求めた愛を武郎が観念的頑迷さにこだわって受容しなかったことに起因した安子の苦悩を、武郎は安子発病後初めてその深い意味を知り悩んだものの、既に病が進行していた安子の心を武郎は救う事ができなかったという悔恨であった。

もう一つは、文学への止み難い希求が安子の不在をすら願った(『幻想』T3)という自らに対する

嫌悪であったろう。

安子に強いそれらの犠牲の上に築きあげた文学の世界は、しかし、彼自身の内部に自らを指弾し追及する刃を研ぎ澄ます結果となった。

奇跡の3年間の出発点に佇んでいたのは、彼との愛の確執に苦しんでいた安子であり、その苦悩の中から授かった三人の遺児たちであった。

武郎はおそらく、そのことを終生受け止めながら生きようと、書く都度決意を新たにしたのであろう。

「こんな孤独な中にいて、しっかりと生命の道を踏みしめて行く人はどれほど悲しいだろう」

しかしこの作品を描いた時期になって、そのように安子の死を振り返るがために精力的に書き進めて来た創作力に限界を感じるようになったことを、武郎は深刻に意識するようになったのではないだろうか。それは、創作に向けた想像力や筆力の限界というよりも、安子の非在と子どもたちの存在が武郎に問いかける心の暗部、つまり、ありのままの自分とはどのような人間なのかという自問によって、彼のアイデンティティが融解し虚無化の危機に瀕していることを自覚するに至った内部矛盾であった。

その内部矛盾が極限に追い込まれた悲鳴のような呟きが、この作品の末尾に至って発せられたのである。

「さうだ。この私信は矢張り私の子供達の母なる「お前」にあてよう。謎のやうなこんな文句を私の他に私らしく理解するのは「お前」位なものだらうから」(P542)

亡き妻しか理解できようもない「謎のような」私信とは、伝えること伝わることに絶望した表現行為である。したがって、そのような私信の呟きは、実態のない虚無に向かって書いた作品であった。このような、作品とはいえないような作品『小さき影』を、武郎はなぜ書かざるを得なかったのか。

『フランススの顔』(T5)、『死と其前後』(T6)、『平凡人の手紙』(T6)、『実験室』(T6)、『小さき者へ』(T7)など、この時期に集中して描かれた作品の中で一貫して追求してきたテーマは、ありのままの自分とはどのような人間か、という探求であり、そのことを自身の内面奥深くに降りて探し求める思索は、安子の死について考えることと同価であった。しかし、自己分析を深く抉れば抉るほど、その行為の主体である彼自身のアイデンティティが内部矛盾を深めていくというジレンマを辿ることになった。その行き着いた先が、『小さき影』に表白した深い虚無感であった。この作品は、この底なしの虚無感が遂に彼のこのテーマを辿る創作活動の旅を断念せしめるに至ることを意味するのではないだろうか。上述のテーマに基づく一連の作品群の最後に『小さき影』が書かれて以降、このテーマに関わる作品は、私の読む限り登場しなかったように思う。このテーマに関する最後の作品となった『小さき影』ではあったが、かと言って、テーマの追及が尽くされたわけではなく、むしろ、絶望に近い混迷を表明する作品となった。

このことが、武郎を無傷で釈放するはずはなかった。その最終形は、この作品の舞台となった軽井沢の浄月庵において最後の自己表現をもたらすことになる。

波多野秋子との心中に赴く道行の中で、武郎は『小さき影』が脳裏を掠めたはずである。子どもたちと共に安子の三周忌を過ごし、自身の創作活動によって虚無感を深める結果を招いた魂の危機、心中道行の背景と原因を成したアイデンティティの裂け目を意識したはずである。

武郎が心中の場所をなぜ浄月庵に定めたのか、いまひとつわからなかったが、ひょっとしたら、『小さき影』を書いた当時以降の自身の混迷に決着をつけようとしたからだったのかもしれない、と、今ふと思った。もしこの直観が当たっているとすれば、これは何とも深く恐ろしい作品である。

(余滴)

この作品は、発表後もあまり注目されなかったようである。表面的にも深層的にも個人的状況の匂いが強く、読者の興味を引かなかったのかもしれない。しかし、例外というものはいつにもやはりあるもので、武郎は吹田順助あてに次のような書簡を送っている。

「『小さき影』を認めて下さったことを深くよろこんでいます、あれは多くの人達からは見落とされそうなものだと思っていましたが果たしてその通りでした。それに兄が認めて下さったので非常に力強く思ったのです」(大正8年1月23日／吹田順助宛)

武郎はこの作品を、読者の興を誘うことを念頭に書いたものではない、ということがわかる。もっとも、彼の創作姿勢は常に自分オリエンテッドだが、この作品は特にその傾向が強いことを彼自身がわかっていた、ということなのだろう。それがどのようなことを意味するのかは、すでに読解したような背景と状況を考えると、頷けるものがある。

このことを強く想像させる、もう一つの書簡にも触れておきたい。

この作品『小さき影』は、大正8年の1月5日から13日までの「大阪毎日新聞」と「東京毎日新聞」に計16回に分けて連載されたものなので、執筆も新聞掲載の直前であつたろうと思われる。

その一ヶ月ほど前、武郎は灰谷やす子あてに書簡を認めている。

この書簡の中で、灰谷やす子と武郎は初めて書簡を交わしたことが記されており、彼女が武郎宛に手紙と共に自著を送ったこと、それを読んだ武郎が返事を書いたことなどがわかる。

この中で、病床にあった彼女への労りの気持ちからと思われるが、武郎は初めて書簡を交わす相手に、半ば唐突に、亡き妻のことを語っている。灰谷やす子の文面の一節にあった「死に面した時に生が赫く・・・」に武郎の内面が深く刺激され、そのことから彼も心の奥底にしまい込んでいた心情

が一気に解放され、問わず語りに吐露されたものと受け止めることができる。また、亡き妻と同じ名前の女性への親近感が反映されたことも、些事とは言え考えられるだろう。

「『死に面した時に生が赫く・・・』の言葉ではじまる一章などは病の中にあられるあなたの筆を通じて何ふと急にこの世が輝いて来るようにさへ思ひます。御察しかも知れませんが私は二年前に妻に死別れた身です。妻を私は吸い取ってしまひました。妻が死ななければこんな切な実感は得られなかったかも知れませんが然し今でも妻は矢張り生かしておきたかっと思ひます。御良人や御子様達が祈り願って居らるる所も亦同様だと思ひます。許されるなら一永生きして上げて下さい。」
(大正7年12月13日／灰谷やす子宛)

武郎の亡き妻への想いが、その屈折した深さのまま伝わってくる文面である。

『小さき影』を生んだ彼の魂と同根の内面性を感じるのは、牽強付会だろうか？

シリウスの影ぼうし 凍てつくニセコの夜空を見上げますと冬の大三角、南端にシリウスが全天を照らすように輝いています。

その夏、その夜半すぎ、信州の天空はどのようなようであったか。長野県軽井沢を舞台にする有島武郎の短編「小さき影」には、星の光がどのように当てられていたのでしょうか。

一幼い三人の男の子を遺して世を去った妻の三周忌を信州の山の上にある K 駅から、十町ほど離れた山懐に建つ別荘で過ごしている一、という冒頭のシーンから書き起こされる「小さき影」は、細部の描写が丁寧です。

誰にあてるともなくこの私信を書き連ねてみる。

こう始めたこの物語。紙にペンをきしませ、文字が文章になってゆきます。

棋士が長考の末に盤面にカチリと指す一手の乾いた音のように、冒頭の一行が、複雑な回路を波紋のように描いて、自身の最期へつながる序章とも響いてきます。

この小説では信州の夏の夜空は書かれておりませんが、天空の盤面にシリウスの影ぼうしが歩んでゆくようにも、私には見えてくるのです。

母を失った子らへ 1916 年（大正 5）妻安子を亡くした武郎。その後夏には、3 人の子供たちと一緒に東京を離れて、軽井沢の別荘で過ごしました。この作品はその夏のある日を身辺雑記ふうに綴っているようにも、装っています。

母を亡くした子供たちへの父親としての想い、作家として物語を創り出すことの苦悩をないまぜに、刻一刻をいとおしむかのように紡いで、影のように主題を映し出します。

物語では、女中に子供たちを託し、電話で留守番役を頼んだ母の到着を待たずに、夜行列車で帰京します。出発前のひと時、眠りにつかせた子供たちの様子を気にかけて、亡き妻の遺稿を読みふけるシーンは印象深く、朝東京について自宅に向かう途中では、車が故障して周りにできた人垣に「**どの顔も木偶のようだ、人間は孤独で独りぼっちなのだ**」と。

親子の情愛、自分と社会とのかかわりあい、が行間に見え隠れします。作中、長男行夫が目を覚ました時「**大きく開いた眼で闇の中を見廻すだろう。而して暗闇の中から侵して来る淋しさ恐ろしさにせき立てられ**」。それは作者自身の姿をみているようでもあります。

予感は細部にやどり 一私にはもう書くことがない。さうだ。この私信は矢張り私の子供たちの母なる「お前」にあてよう。謎のようなこんな文句を私のほかに私らしく理解するのは「お前」位なものだから。一と、書いてペンを置きます。

この時期は作家有島武郎の絶頂期でもあります。「カインの末裔」（1917）、「小さき者へ」（1918）、「生れ出ざる悩み」（同）、「或る女」（1919）、「惜しみなく愛は奪う」（1920）、「一房の葡萄」（同）と相次いで出版。そして、1922 年（大正 11 年）「宣言一つ」を以て有島農場を解放し、あくる年かの軽井沢の別荘で女性編集者との自死へと続きます。

その光跡は、今まさに最後の輝きをなし、やがて消滅してゆくであろう白色恒星シリウスの命運とも共鳴しているかのようです。

と、一閃、羊蹄おろしが猛吹雪に。私の真冬の夜の夢は、白い闇にとざされました。(E)

「小さき影」(1918年)を読んで

Tkn.

「だれにあてるともない私信」、確かに小説ではない、日記のような作品である。

妻の三周忌の暑い夏、K澤を訪れ3人の子どもと夏を過ごしたが、20日も過ぎると「仕事をしていない」ことに「段々やきもき」し始め、耐えられなくなり、夜汽車で東京に戻るという挙にでた。(そんな気持ちは分からなくもない。入院していてもPCを持ち込みたくなる気持ちを体験したが、共通する気持ちであろうか。)

K澤での3人の子供たち、3様の振舞いは生き活きと描かれていて、自分たちを置いて父親の夜中に汽車で東京に帰ってしまうという不可思議な行動への反応もみごとに再現されている。4人の親子の入浴は、現代も変わらぬ家族の風景である。

この歳の1月に「小さきものへ」を発表、「生まれいずる悩み」を新聞に連載中、翌年には「或る女」を出版している。作家としては充実しているときだったと思うのだが。

新聞連載を終えて、次の小説の構想を紡ぎ出そうとしているときに自宅の書斎を離れ、「一日々々を無駄に肥りながら送って行くことが如何しても耐えられなくなった。…早く帰ろう。」そして、夜行列車で義弟家族とともに東京に戻る。

「小さきものへ」では、「…私の心はややもすると突き上げてくる不安にいらいらさせられた。ある時は結婚を悔いた。ある時はお前たちの誕生を悪んだ。…家庭の建立に費やす労力と精力を自分は他に用うべきではなかったのか。」と嘆くが「しかし、運命が私の我儘と無理解とを罰するときがきた。」と続く。

東京への車中、読もうとした開いた包のなかから安子の作品「松島」が出てきた。その間には6歳ころのおかっぱ頭の童女を見て、何のための生、何のための死、そして自分、ぞっとするほど薄気味悪く恐ろしくなってしまう。

K澤での子供たちのはしゃぐ様子に、彼らの一挙一動を自愛をこめてまじろぎもせず見守る眼を運命の目の外に彼らは持たない、との悲しみに襲われる。「運命の眼は何時出来心で残忍な眼に変わらないかを誰が知り得よう。」

有島は東京に戻り、気負って原稿に向かったが、厭な気分の眠りに襲われ、本当に苦しい涙が流れた。「私にはもう書くことがない」「誰にあてるともなくこの私信を書いた。」「この私信は矢張り私の子供たちの母なる『お前』にあてよう。」「私の外に私らしく理解するのは『お前』位なものだろうから」と書いている。

帰路の車が故障で停まり、思わず見えた多くの見知らぬ人々の顔は木偶のようで、普段見つめもしなかった人間生活の実相が見え、「本当はだれでも孤独」「しっかりと生命の道を踏みしめていく人はどれほど悲しいだろう。」と感ずる。(「都会の雑踏」という一言の中に、無数の人々の生活や心理が隠されてしまうが、通勤途上や帰途のうちに、小さな全国展開のコーヒー店の通りに面した

横並びの席に座り、窓外の人波を見ていると似たような感覚を抱いたように思う。)

「小さき影」に翻弄される！

Ish.

さて、そろそろ読み直して、執筆にあたろうかな。データは何処かな。メールの奥に潜り込んで中々探せない。仕方ない、青空文庫で見ようかな。「お前たちが大きくなって、一人前の人間に育ち上がった時・・・」あれ、何か違う様な気がします。確か軽井沢の別荘で子供と過ごす話がメインだったと思うのだけれど・・・「前途は遠い。そして暗い。・・・恐れない者の前に道は開ける。行け。勇んで。小さき者よ。」これは「小さき者へ」でした。間違って読んでしまいました。さて気を取り直して、今度は、国立国会図書館のデジタルアーカイブから検索したデータを閲覧します。「崖、街中のある・・・彼は最初に、かぶっている帽子を水の中へ叩きつけた。・・・靴をぬぎ、ズボンをぬぎ一切のものを水の中へ叩きこんだ。そして身一つとなったとき、彼は遂にそれらも水の中へ叩きつけた・・・どぶんという音がした。」えっつ、これも全然違う。題名は、「小さき影」とあります。どういうことでしょうか？そもそも有島の作品でないかも知れません。1912年12月作とあります。中々、本題に辿り着けません。今回は感想文を諦めろという事でしょうか、誰かの陰謀？還暦になりいよいよ呆けてきたのは自覚していますが、中々本題に入れません。結局、最初に、ネットで引っ張ってきたコピーを見て、本当にこれかなと、訳が分からなくなってきました。ここは深呼吸、気を落ち着けて読み直して見ました。「誰にあてるともなくこの私信を・・・私の三人の子供達・・・彼らは起き抜けに海水浴を・・・さうだ。この私信は矢張り私の子供たちの母なる「お前」にあてよう。謎のようなこんな文句を私の他に私らしく理解するのは「お前」位なものだろうから。」どうやらこれみたいです。良かった。でも「お前」というのは誰でしょう？普通に考えれば、妻の安子でしょうか？亡き妻、3人の子供、分筆を生業にしている私、信州の避暑地、妻の遺稿「まつむし」となれば有島の自伝だという事は明白です。子供の養育、小説家としての自己の欲求との狭間に苦しみ結論の出ないことにヤキモキしつつ、最終的に救いの手を、亡き妻に送った手紙に託す。どの立ち位置に身を置くのが良いのか、悩み苦しんでいる自分自身を描いたそんな作品に思えます。前置きが長い感想文になりました。でも、ここからです、ちょっと、寄り道にお付き合い下さい。

<白樺派と「或る小さき影」について>

「或る小さき影」といえば、同時代（1911年）に白樺派の面々が、浮世絵の代わりに手にしたロダンの3つの彫刻の一つで、とても有名です。冒頭でちょっと触れましたが、誤って検索した「小さき影」は実は別人の書作でした。執筆者は相馬泰三：同人雑誌「奇跡」を創刊。紙芝居の向上にも貢献するとあります。（コトバンク）そして面白いのが、有島の「小さき影」（1919年）の中に、「汽車を待つ間にメレジコフスキーの先駆者を読む」とあります。ディミトリー・メレシコフスキー：ロシア象徴主義草創期の詩人にして、最も著名な思想家である。（wiki）そして、この「先駆者」を翻訳したのが、谷崎精二です。谷崎精二：谷崎潤一郎の弟、英文学者、相馬泰三と「奇跡」を創刊。そしてもう一人、この谷崎と対立していた人物が吉江喬松、この人も「小さき影」（1927年）を執筆しています。もしかしたら、ここで上げた面々は、ロダンの彫刻から発想して小説を執筆していたのかも知れません。同時代のこの題名の一致と文学者の繋がりは、ちょっと面白いエピソードだと思いませんか？相関関係をまとめると、下記の様になります。

白樺派：「或る小さき影」を入手。文壇の仲間に披露する。1911年（勿論、有島も観たでしょ

う)

有島武郎：「小さき影」執筆（1919年）

相馬泰三：「小さき影」執筆（1912年12月）

谷崎精二：1912年「奇跡」創刊 相馬泰三も参加。「先駆者」翻訳 有島が小説内で読んだ書籍。

吉江^{たかまつ}喬松：「小さき影」執筆（1927年） 明らかに「ある小さき影（ロダン）」を描写したものである。

早大文学部時代に、谷崎精二と対立する。結局、谷崎が文学部長になる。

それでは、最期に一言！

真の発見の旅とは、新しい景色を探すことではない。

新しい目で見ることなのだ。

マルセル・プルースト

「小さき影」の本帯を考えてみました

Ism.

○本帯その一 「小さき影」と妻安子への愛

「お前」が好きだったラヴェルのパヴァーヌを奏でよう
まだ、有島の中で妻が地上から綺麗にこそぎとられてしまったことを認めて
はいない一周忌。ローファーを気取って見た「平凡人の手紙」から二年。
有島武郎の決意ともとれる佳編。亡き妻に捧げる甘美な旋律で描き上げる。

偶然ではないことが起きる。

子供達が淋しい思いをすることを覚悟で悔やむ気持ちを持ちながらも、執筆に取り組むためにK澤から小石川へ戻る決意をする。出発の夜、読みさしの本を取り出すため包みを開くと、妻の遺稿が出てくる。その中に妻の六歳位の時の写真が出てくる。

“たしかに此世に生きてみた事がある”、“今は何処を探してもみない”、“何んの為に生きて来たのだ。何んの為に死んだのだ。少しも分らない。そんな事を思っている自分は一体何だ。”、“ぞつとする程薄気味悪く恐ろしくなって来た。自分自身や自分を囲む世界がずつと私から離れて行くやうに思へた。”

妻の存在は「生」から行方知れずになり、彼女の人生に関わった自分自身が乖離していくような気分になっていく描写がある。

そして、涙に潤んだ目を通して映る、闇の中に浮かび上がるもの。少しずつ遠くに目をやるとアルプスの連山、空の間に見え隠れする星に、“あすこの世界……ここの世界。”

と、妻の存在する場所と自分の存在する場所をやや平静な心をもって考える。

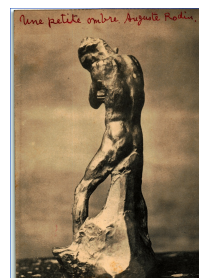
そして、この私信は「お前」に宛てる……。一人坊つちが心に深くしみる。

○本帯その二 「小さき影」と Little Shadow 1885



“こんな孤独の中にあて、しっかりと生命の道を
踏みしめて行く人はどれ程悲しいだらう。”

心に焼きつく僅か一尺あまりの裸体像
巨匠ロダンの「或る小さき影 Little Shadow」
夢うつつの展覧会から早七年の年月が流れた。
有島の心を重ねた作品はクライマックスへ。



さて、込み合った汽車に乗りこんだ「私」が、窮屈な恰好で眠るまでの状況をあれこれ描写するシーンが滑稽である。“足の置場がぎごちなくつてならなかった。平に延ばして見たり、互違ひに組んで見たりしたが、如何しやうもなかった。足は離して捨てる事が出来ない。”

あれ、1910（M4 3）白樺派が『白樺 ロダン号』で～ロダン第七十回誕生記念号～を特集し彫刻家ロダンを日本に紹介したと Inh 氏の感想文でも書いているが、ロダンの作品は頭や体幹（トルソ）などバラバラ死体のようである。これがその後の彫刻家に大きな影響を与えており、彫刻の常識といわれればそれまで。「地獄之門」においては門の上にそれぞれ恋愛・死・悔恨の3ポーズをとらされている影とかアダムとか言われている人がいて、同じ型を鑄造してばらばらにくっ付けたものだという。窮屈な姿勢の表現は、ロダンの作品を皮肉っているように思えてくる。

当時の税関でがロダンの作品の価値がわかる者がおらず、金属の関税のみで白樺派が受け取った3つの作品のうちの一つに、「或る小さき影 Little Shadow」というのがある。もちろん、有島武郎も鑑賞したでしょう。

“広野の真中にたった一人坊ちで立つ人のように思った。”、“こんな孤独の中にゐて、しっかりと生命の道を踏みしめて行く人はどれ程悲しいだらう。”

こんな風に、モチーフを繋げるところは流石に有島武郎だ！

わたしも、ちょっとロダンの作品に毒されロダン頭になっちゃった。これで正解でしょうか、有島さん。

『小さき影』・・・「私」の不幸

Tms.

1 初めに

『小さき影』という作品は、のびのび夏を楽しむ子供たちとそれを見守る父の睦まじく幸せそうに見える日常が、大きな不幸の影に覆われている様子を描いた小説である。しかし、短期連載の新聞小説であることを意識したためか、「私」という一人称が語る形式のためか、不幸は微妙な表現の背後に隠れていて見逃しやすく、そのうえいびつな姿をしている。

新潮社版「有島武郎全集」の解題によると、『小さき影』は1919(T8)年1月5日から12日まで八回に分けて大阪毎日新聞に発表された作品である。有島にとっては新しい読者層を獲得するよい執筆機会だっただろう。読者と主題を十分考慮した上で書かれた作品だという前提で連載の各回ごとにどのような不幸や不幸の原因が表れるか考えてみる。(小見出しの後ろに各回の該当範囲を全集の解題に基づいて示す。)

2 私信の宛先

冒頭の一行「誰にあてるともなくこの私信を書き連ねてみる」の巧みな仕掛けに目が止まる。この一行で読者は自分も私信を読むように招かれていると理解し、一気に作品世界に入り込み、「私」の語りを聞く当事者に変身させられる。これが仕掛けの一番目である。読者は5日に第一回を読むのだが最終回の12日になって実は「お前＝亡妻」あての私信だったとわかる。この意外性が仕掛けの第二である。推理小説を終わりの10頁をまず読んで、やおら初めに戻って読む読者も結構多いらしいが、新聞小説ではこんな裏技は通じない。読者ははぐらかされた気分とともに小説世界から現実に引き戻される。私信を書くことを想定してみると、宛先が決まっていなければ書き得ることは膨大にあるのに実際には何一つ書き得ない。結局、宛先未定で書き得ることは書き手自身が受取人の時に意味のある事柄以外にない。従って、読者は気付かずに「私」の現在の心境を読むことになる。これが第三の仕掛けである。1918年11月11日の休戦協定の話題が私信の中に書かれないのは、それが現在の「私」には無意味だからである。

3 子供と仕事の板挟み (第一回 531頁初め～532頁11行目)

連載第一回で登場する「私」は東京から避暑地K駅の別荘に来てほぼ三週間、元気に遊びまわる子供たちを見守る慈愛に満ちた父親である。そして、資産家で、1年前に妻を亡くした、職業不詳の男である。大阪毎日新聞の読者で「私」に比肩できる資産家はほぼいないから、彼は資産家の日常報告として興味津々で読み始めるだろう。「私」がK駅での子供たちとの生活に半ば満足し、半ば苛々している感覚は不思議に思えるかもしれない。「私」は気分が纏らず毎日無駄な時間を過ごしていると感じ、東京に戻れば仕事らしい仕事ができると考えるとK駅にとどまることに我慢がなくなる。「私」の職業は知らされていないから、気分次第でK駅でも東京でもできる仕事らしいのになぜ東京に戻りたいのか不審に思うことだろう。

昔、不登校の生徒たちと接する機会があった。彼らの多くは自分を取り巻く環境が変われば自分

の内的な状況も変化させられると訴えたものだった。例えば転校させてもらえれば新しい気持ちで学校に通えるかもしれない。「私」の苛々にも同じ回路があると感じられ、不幸がそれとなく示唆される。

4 子を捨てる (第二回 532 頁 12 行目～第三回 535 頁最終行)

第二回と第三回では夏のK駅生活を楽しんでいたはずの子供たちが微妙な心理の変化に見舞われていることを中心に語りが進む。それは「私」が仕事のために東京に戻ることを子供たちに伝えたために生じたことだ。夕刻、入浴時、就寝時の三つ場面を使って子供たちの淋しさや不安が募っている様子が「私」の眼から見て描かれる。行夫の心細さが惻惻として伝わり、「私」はその心細さを理解している。

ここには非の打ちどころのない父親がいるように見える。ただし、「私」と子供たちの会話は長男行夫とだけであり、次男敏夫(多分七歳)や五歳の登三との会話はなく、二人は「私」の目に映る様子として描かれるだけである。幼すぎて「私」との間に対話が生まれにくい事情もあるだろうが、「私」に幼い子の心を開かせたり聞きだしたりする心遣いが乏しいこともある。「私」には「三人の心には淋しそうなところが見える」のだが、「それは私の心が移るのかもしれない」と「私」と子供たちの心が同期しているとみて納得している。しかし、この淋しさは「私」が子供たちに押し付けた淋しさだという風に振り返って、強いる「私」の在り方を問い返すゆとりを「私」は持っていない。なぜなら私信が「逸る心」で「気ぜわしくなっている」「私」自身を語ることに急だからである。もっとも、「私」を描く作者は長男との会話の描写で子どもたち全体を十分に描き得ていると見ていることと、新聞掲載の一回当たりのスペースが限られているため省筆を余儀なくされていることは「私」のために考慮しなければならない。それにしても結果として子供たちは次第に置き去りにされ、「私」の秘かな子捨てが始まり、子供たちが味わう不幸が深まっていく。

5 「私」の淋しさ (第四回 536 頁初め～537 頁 7 行目)

第四回では「私の淋しさ」が語られる。偶然、亡妻の遺稿集を手にしたことが誘い水となり、次々と淋しさの核心に近づく記憶や気分が浮かんでくる。次のような順序である。

遺稿集→童女姿の妻の写真→妻との生活の回想→妻の人生の意味→妻の人生を問う「私」自身の心→「私」の現在の生き方→「私」の心の現在→他者との距離。

尻取り遊びのような語りの自然な流れに破綻はないように見えるが、本当は順序が全く逆向きなのだ。

不登校の子供が本心を話し始めるまでには長い時間がかかる。その間、『クララの出家』でクララが沈黙しつつコトバを探したように、何をどのように話すべきか自問自答を重ね、気持ちに整理がついた範囲でゆっくりと語り始める。彼は「転校できれば登校できる」と言うがそれは入り口に過ぎない。「転校」という条件は彼が心の深くに人間関係の躓きを潜ませていることを示している。彼がこの関係の縄目を自分で解きほぐし始めるまでには更に多くの時間を必要とする。

私信を書き始める時「私」は既に「自分自身や自分を囲む世界がずっと私から離れていく」感覚に苦しんでいて、それを語る糸口を必要としていた。亡妻の回想が始まったのは必然的であったと強調するために初めに遺稿集が必要となった。「私」にとって「世界が遠い」感覚がどれほど切迫

した自明なことでも、私信を読むはずの誰かがなるほどと頷くためには、遺稿集から始めなければならぬ。「世界が遠い」と感じることは「私」自身の生き方について考えよと迫られていることであり、その媒介項として妻の人生の意味を問う場面が必要で、そのためには妻の人生の始まりを意味する童女の写真と妻の一生の終わりの遺稿集が必要なのだ。「私」の語りは自分の関心の中心に向かって急旋回している。しかし、「私」は世界の遠さを「ぞっとするほど薄気味悪く恐ろしい」と感覚的に表現しているだけで、もっと語りたことがあるのに隠しているかに見える。そこに問題を残している。そう読んでみると、虚ろな淋しい心が「あすこの世界・・・この世界」へと駆け巡り、自らの居場所や人々との関係やその意味を問うことが不可欠のものとなる。こうして小説は子供たちがパパに置き去りにされる不幸の話であるよりは、「私」自身の不安の話であり、「私」の不幸の物語だと明らかになる。ならば不可欠の問いかけからどのような答えが見つかるのだろうか。その前に、居場所や関係をめぐる「私」の在り方を子供・妹家族・女中について確かめておきたい。

6 寝ぼけた対話 (第五回 537 頁 8 行目～538 頁 12 行目)

第五回は、ベランダで居眠りをしていた「私」が「パパパパ・・・」と呼ぶ声でぎょっと正気に返るところから始まる。弟たちの寝相が悪いのを行夫が迷惑がって夢うつつで「私」を呼んだ声だったとわかり、弟たちをそれぞれの床に移してから、「私」は何かの物音が眠りの妨げになることを気にしつつ彼らの寝姿をぼんやり眺めている。

この場面で「私」は行夫の声を聴くが、行夫は「私」を呼んだことを覚えておらず、「私」と行夫と間で会話は半分だけしか成り立っていない。父親の「私」は事情を察し、子供が寝ぼけ声で要求したことに的確に対応している。対話もどきへの対応が父親らしいと称えたいのではない。一方通行で寝ぼけながらの会話は対話と呼べないだろうが、「私」と子供たちの間には対話未満の一方通行の関係が常態化していて、ここでそのことが顕在化していると観るべきではないか。子供が問い父が答えるという姿は行夫との間にしか存在しないことは既に触れた。少なくとも子供のことを私信に綴りながら、子供たちの不安の根っこにこの生煮えの関係があるなどと「私」は決して思い至っていないし、「私」自身の不安も翻ってこのような対他関係の積み重ねの結果であるとも考えていないはずだ。なお、寝ぼけ半分とは言え、私信に子供の側の生の声に基づいて出来事を記すのは「ぎょっと正気に返る」この場面が最後である。

女中たちとの間にも一方通行の関係が表れる。例えば出発する際に、「どれ程綿密に注意をして置いても、出来るだけの事より出来ないと思って」「留守をしっかり頼むよ」としか言わない。世話を「頼む」切実感の有無も問題だが、それよりも話をする前に話すべきことを引っ込めてしまうことに問題点が浮かんでいる。「私」が使用人に対して宰領を効かせないというのではなく、その前提となる雇主と被雇用者という関係すら十分に形成できていない。その努力や、関係の形成に意味を見出さないのかもしれないが、そうであるなら出来ることだけしてもらえばよいとまるで女中たちの考え方や仕事ぶりの方に非があって、だから何も言わないのだと言いたげな責任転嫁の口ぶりが奇妙なのである。些細な場面の描写だが、「私」自身のあり方が他者への距離の遠さ・不全感となってはね返っているのだと、「私」は気付いていない。

7 観念上の子供 (第六回 538 頁 13 行目～539 頁 14 行目)

第六回は夜中に別荘を出発してから翌朝上野駅に降り立つまでの出来事が時間の順に書かれる。いくつかの出来事の中から二つの場面を取り上げてみる。

(1) 罅割れた関係意識

初めは妹の家族が義弟の出発準備を手際よく手伝う場面である。「私」は「人々の間から睦まじそうな笑い声が聞こえ」るのを「黙ってそれを見守」っている。「私」の家族とは対照的な家族を紹介する意図とも思えない。「私」は彼らと一言も会話していない。やり取りを私信に書き留めるほどの価値はないと見て省略したのだろうか。しかし、女中に「留守をしっかり頼むよ」と話したことは書いても妹家族との会話のことは書かない。書かないことが妹の家族と「私」の間の距離感を示すのだと見える。勿論、小説の作者なら一回分のスペースを考えて割愛したとすることができる。しかし「私」は作者ではないから「私」の必要に合わせて書かないことを選んでいる。とすれば、「私」の都合は端から眺めているという「私」の関係意識を書くことであって、親密ぶりを書くことではない。妹家族へのこの書きぶりの背後にも人間関係についての罅割れた意識が顔を見せている。

(2) 「私の子供たちというもの」との対話

二番目は残してきた子供たちの事を考える場面だ。その場にいない、脳裏に思い描かれた子供たちの姿は具体的である。「ぼりぼりと足を搔いた、その音」、「転げてきた敏夫の姿」、「無頓着に脱ぎ散らかした」靴など、子供たちへの濃密な愛情が投影されている。だから私信の文面には出てこないが、この空想の子供たちとなら「私」は闊達にまた愛情あふれた空想の対話を交わし、心を通わせられる。その時「私」はいかにも慈愛に満ちた父親としてふるまい、一方通行の関係などあるはずもない幸せな時間を持つ。この時の「私」は子供たちの姿を思い浮かべることによって幸せを感じているので、心配する気持ちそのものは背景に退いている。この幸せは不幸なことに「空想中の関係」だからこそ実現出来、味わうことが出来る幸せである。そのことにある瞬間に気づくからこそ「振り払うように」現実に戻るのである。

空想の場面に登場する子供たちは観念化された子供達である。彼らは「私」に逆らうことなく、「私」を満たしてくれる。「私」を心配させるというあり方さえ「私」を満たす満たし方の一つである。ここでは子供たちとの関係の形成は「私」の思うままである。なぜなら、「私」は「私の子供たちというもの」と向き合っているからである。生身の敏夫と向き合っているのではなく、敏夫という観念と向き合っているだけだから現実の敏夫の側からすれば不幸な出来事である。つまり、「私」は子供の観念化によって子供を愛していると感じることが出来るが、そのことは生身の子供が不幸を強いられていることと表裏一体なのだ。そしてそのような関係にあること自体を「私」が対自化することはない。「私」には観念の、想像の中の子供たちとの関係性の方が actuality があって好ましい、「私」の一方的な心情を吐露しやすい存在として想起されるのである。子供たちが「遠い世界」に引き退いていった後、再び彼らに近づくためには、観念的な存在として思い浮かべるしかないという事態が顕在化している。空想上の家族に対しての方が親密に感じられる倒錯した心情が透視できる。

8 異変の予告 (第七回 539 頁 15 行目～541 頁 1 行目)

上野駅で車が迎えに来るまでの間、「私」は列車内の空想を反復する。

空想は子供たちが目覚めなかったことを期待する「私」が、逆の場合を想定し女中も登場させているので、関係性の現れ方が少し違って来る。目を覚ました行夫が「パパ」と小声で呼ぶが返事がないので、淋しさと恐ろしさに急かされて大声で女中を呼びたてる。その後の子供と女中のやり取りを二人の会話を交えて思い描く。行夫がくどくどと質問し女中が突慳貪な対応をする想像などは愉快なものではないが、「私」自身は子供を心配する自分自身を確認することでもあるのでこの空想は嫌な空想ではない。しかし、行夫が女中の思いやりのない言葉遣いに傷つくはずだと想像すると、「私」の放恣だが幸せでもあるはずの空想の調子は乱れる。「私」と行夫の二者間では傷つく行夫がいたとしても直ちに「私」が癒すことが可能だが、女中が介在すると女中に傷つけられた行夫を「私」は救出できない。彼ら二人の出来事として「私」が入り込めない領域を形成し始めているからだ。三者の関係性が空想の中で生むノイズに対処できない「私」は、自らを責めて「悔やむような心持」になる。

漸く車が来て乗り込む。ところが窓外の町の印象は現実的になったり夢想的になったり、縮小したり膨張したりする。外界を受容する感覚に乱れが生じていることを自覚している。寝不足のためだと言いつ聞かせるのだが、折あしく車が故障し往來を塞いだため渋滞を引き起こし、人々が車を取り囲み始め、この直後に「私」は決定的な異変に陥る。

9 奇態な妄想 (最終回 541 頁 2 行目～終わり)

最終回は、前日に予告されていた異変と「私」による異変の意味付けが語られる。

(1) 人間生活の実相

異変とは、車を取り囲んだ人々が木偶に見えたこと、「私」が荒野に一人取り残されたように思ったこと及び人間生活の実相が眼前に立ち現れたことである。異変は短時間で消退した。

人間生活の実相とは、人は孤独な存在であること、孤独を紛らすために愛したり憎んだりして孤独から遁走しようとする事、(しかしそれは不可能なので)「生命の道を踏みしめて行く人は」「悲しい」ということだった。「私」は異変を奇態な妄想と呼ぶが、もちろん韜晦である。この韜晦の姿に「私」の対人関係のゆがみが表れている。ここで言う実相は異変の渦中で誰かが耳元で囁くのを聞いて悟ったことなどではなく、「私」が胸底に潜めていたことを言語化したものである。そしてこの言語化によって「私」の私信は実質的に終わる。

しかし、私信は形の上でまだ終わっていないので、二つの戦略的な終結部を設けて私信を閉じる。一つは発見を奇態な妄想上のこととしてではなく、「私」の生活上の現実のこととして語りなおすこと、他の一つは「お前」が宛先だと明かす所以を語ることである。

「私」のこの戦略がもたらす目的にこだわらざるを得ない。

(2) 「書くことがない」の二重性

家に着いた「私」はいささか気負って「原稿に向かった」のだが、寝不足と暑さと焦慮のために迂闊にも仮寝をしてしまう。物音に驚いて目を覚ますと、短い眠りのおかげで「私」の頭は明瞭に冴えていた。この冴えた頭で懸案の原稿のことを思うと「苦しい涙が流れた」だけではない。「私

にはもう書くことがない。目を覚ましてから私が書きつけておくことは是れだけで沢山だ」という認識が生まれていることに愕然とする。いや、この瞬間にはたと気づいたのではなく、随分前から心の片隅で発酵していた辛い認識を再確認したという方が正しいだろう。本文にそのような記述はないので推測にすぎないが、傍証はある。

例えば、つい先刻仮寝をする直前の「私」が味わっていた「焦慮」は何に起因するのか。満を持して原稿に向かったはずだから「気分が纏らない」ためとは考えられない。原因は「書かねばならぬ、しかし書けない」という葛藤だったと推定せざるを得ない。K 駅で過ごした二十日間にも「仕事のこと」を考える機会が幾度となく有って、そのたびに様々な構想が浮かび、その最後には決まって書けないかもしれないという不安に見舞われていただろう。そもそも「書くことがない」という認識は長い迷いや試行の末にやってくるもので、「焦慮」しつつ短時間の仮寝をした後に突然やってくる性質のものではありえない。また、宛先を決めない私信は自分にとって意味のある「私」の心の現在を書くことだという前提に立てば、一睡後の今、断定的に「書くことがない」と書くことは「私」にとって意味のあることが存在しない、だから書けないという意味になる。葛藤は「書きたいことがある」という気持ちがあるから生じるはずだが、その「書きたい＝書かねばならぬ」という欲望自体を丸ごと否定するやり方を用いて葛藤そのものを雲散霧消させるのである。とんでもない荒業だが、自分のために書くことさえ無いとなれば自分自身との関係形成の契機さえ壊れているということであり、虚無が「私」を捕えにすぐそこに来ている。このことは「私」にとって「人間生活の実相」は孤独だと認識することの言いかえに他ならない。あえて大げさに言えば「私」の identity の基盤そのものが崩れる事態なのであり、妄想として他愛ない挿話のように記しているものの、現実の「私」が陥っている窮地を端的に訴える極めて深刻な事態である。

ところで、「書くことがない」はわざと二重に読めるようにぼかしてある。私信をだれに宛てるともなく書いてきたが書き尽くしたので「書くことがない」という意味と、文筆業を生業とする者として他者に伝えるべきことがないという意味の二つである。

前者についてはとても分かりやすい。しかし、そうなら何もこんな切羽詰まった表現をするまでもなく淡々と書けば済む。ただし、小説冒頭の巧みな工夫との首尾一貫性を図り、唐突な終結になる奇妙さを弁解する遁辞としての役割を担うことはできる。それは苦し紛れのやり方だがそんな方法を使う気持ちを理解してくれるのは「亡妻」以外にいないからと、宛先を指定する種明かし効果も含めて用意したものだとみるなら、これはこれで解釈の整合性は保たれる。二つの戦略的終結部として機能することにもなる。しかしそれでは「書くことがない」の衝撃の強さまではカバーできないので、後者の解釈が有力になる。

(3) 絶体絶命からの出口

文筆業として「書くことがない」という意味だとしても、その理由について何の説明もないので、私信の内容に照らして解釈のよりどころを探し出すしかない。ただ、「私」の荒業の背景に隠されていた深刻な事態を「私」がその通りだと同意するとは限らないのだが。

人間関係の形成における躓きが存在し、それが深刻な事態を招いているというのが一番ありうる解釈であろう。躓きについては私信の語り方の綾に立ち入って拾い出しておいた。子供たちに不幸

を強いること、子供を観念化していること、女中の雇い主らしくない振舞、妹家族への態度、「私」自身を対自化しないでいることなどに関係のゆがみを見、躓きを前提としたときに理解できることとして取り上げてきた。

さて、深刻な事態について「私」は「生命の道を踏みしめて行く人はどれ程悲しいだろう」という表現で言及している。しかし、「私」は「私」自身に対して「生命の道を踏みしめ」とはどのようなことを語り残している。自ら紡ぎだした言葉なのにその意味を自らに対してさえ言いあぐねているのである。「書くことがない。・・・是だけで沢山だ」と自暴自棄に陥ったみたい書きつけるとき、「私」に分っているのは自分が「生命の道」の途上にいないということだけだ。「生命の道」という言葉にたどり着いたことさえ「私」には望外のことだったかもしれない。「生命の道」という言葉以上のことを今は語りえないので、「書くことはない」なのである。これは危機の告白だが同時に希望の表現でもある。書きたい欲求を全否定するのではないもう一つの道がここにあるからである。

10 終わりに

本論で書き洩らしたことを少し補っておきたい。

(1) 「私」は自らの居場所や人々との関係やその意味を問うた時どのような答えを見つけられるか(『5『淋しい心』』)という問題設定に対する答えは、「私」は適切な答えを提出できていないのである。しかし、「人間生活の実相」は妄想の中で感じたことだと本心であることを隠しているが、「生命の道」という言葉を提出していることに危機から抜け出る希望があると見る事が出来る。文筆を生業にする「私」は今後この言葉をどのように定義するか問われる。

(2) 小説の題名『小さな影』は「私」と子供たちを覆う不幸のことだと解釈する。「小さい」とはぐらかしているが実はとんでもなく大きな不幸に見舞われている。この不幸は地震などのように外界からもたらされるものではなく、「私」の生き方が招き寄せるものという意味で生易しいものではない。

(3) 「私」の生き方は人間関係形成の下手さ加減という点に現れる。例えば K 駅に来てくれるように頼んでも息子を子供と一緒に居させてやりたいと考えて東京に居続ける母心に気付きながら、仕事大事の名目で了解なしに上京し、母を慌てて K 駅に向かわせて自分は安心するという、心遣いの足りない行動に「私」の自己認識とは異なる「私」像が浮かぶ。これではだれが相手でも躓くのは当たり前と見える。この躓きが高ずれば世界を遠く感じたり、不全感に見舞われたりもするだろう。人間関係の隘路がどのように生まれるのかについて、自己を解析する作業に手を染めない限り、次第に自己閉塞し自閉に追い込まれることは目に見えている。

(4) 『小さな影』の私、『動かぬ時計』の国家学者、『凱旋』の老将軍、『平凡人の手紙』の私、『死を恐れぬ男』の相場師、みんな似ていないだろうか。家族や妻子についての描き方に底流する共通の発想があるように感じる。対幻想のあり方という視点で括ることが出来るかもしれないと思う。しかし、実際にその視点で読みを深めるのはとてつもなく難しいだろう。

11 蛇足

この小説は大阪毎日新聞に掲載された。だから船場のあきんどにこの小説の感想を聞いたらこう

言うかもしれない。

「いい気なお金持ちが何をいうとんねん、子供思いのお父はんの子育て奮闘記や思うて難儀な子育てに同情するわ思うてたら、しょうもない泣き言を聞かされとったんやわ。「書くことがない」なら書かんかてようおますやないか。ぜにならぎょうさん持ってなはるやろから、こんな辛気臭いことわざわざ人に打ち明けなんでもよろしやないか。お金持ちはんの矜持てなものがいいのかしらん。男が廢りまっせ。とんだ暇つぶしやったわ。」

この小説は大阪毎日新聞に掲載された。だから船場のあきんどにこの小説の感想を聞いたらこう言うかもしれない。

「いい気なお金持ちが何をいうとんねん、子供思いのお父はんの子育て奮闘記や思うて難儀な子育てに同情するわ思うてたら、しょうもない泣き言を聞かされとったんやわ。「書くことがない」なら書かんかてようおますやないか。ぜにならぎょうさん持ってなはるやろから、こんな辛気臭いことわざわざ人に打ち明けなんでもよろしやないか。お金持ちはんの矜持でなものがいいのかしらん。男が廃りまっせ。とんだ暇つぶしやったわ。」

つまらない小説だと酷評するコメントだが、類似の感想を持った人も多いはずだ。有島 freak としてどのように反論できるだろう。私信のほとんど最後の部分に記される次の言葉の解釈に納得してもらえたら、少しは評価が変わるかもしれない。

私にはもう書く事がない。目を覚ましてから私が書きつけておくことは是れだけで沢山だ。

「私」の生業は物書きである。その「私」が「書くことがない」と強い語気で言うのだから、これはもう廃業宣言みたいなもので、私信を読む者は一体何が起こったのかと驚かせられる。

実は、この奇矯な言葉にはいくつか伏線がある。そこで、時間的に近い過去の方から順にさかのぼって「実は…」と廃業宣言に至る因果関係を辿ることにする。

実は、仮寝から目覚めたばかりで今は頭が冴えているが、先刻までは「焦慮」に取りつかれていた。気負いこんで原稿用紙に向かったばかりだというののである。寝不足も手伝って仮寝をしてしまった。どんなことに焦っていたのかは隠しておいて、仮寝の直後に上のような爆弾発言が出てくる。計算されたものだ。

実は、仮寝の前、家に戻る直前に事故で乗っていた車が立ち往生し、人々に取り囲まれる事件があった。その時「私」は人々が木偶に見えるという奇妙な体験とともに人間生活の実相を眼前に立ち現れる経験をする。人間は孤独な存在で、誰かを愛したりするのは孤独を紛らわすためでしかなく、その努力もむなしいもので孤独からは逃げられないのである。果たしてそうならば生命の道を歩むのは悲しいことだと痛切に思う。ここに「私」が追及すべき主題が言語化されている。ただしこの眼前に現れた奇態な妄想は、本心なのに根拠のない想像なのだと嘘だと韜晦している。

実は、本心を隠すには「私」なりの事情がある。第四回で妻の遺稿集を手にする場面が描かれる。その時「私」は「自分自身や自分を囲む世界がずっと私から離れていくように思え」、「薄気味悪く恐ろしく」なる。この経験は自分が一人だけ孤立して取り残される感覚と言い換えられたりして誰にでも起こることではあるが、日常の感覚からは外れている。だから薄気味悪いからと言って誰かに打ち明けたりすることはなく、自らの裡にしまっておかれることが多い。しまっておくことと隠

すこととは同じではないが、もし精神医学的には離人感と呼ばれるこの感覚が日常的に生じているなら、世界とのつながりが途切れる事態で、むしろ隠しておこうと考えるのが自然だ。家族との暖かい交流や友人たちとの親密な感情の交流にも支障が生じ、やがては自分と外界・社会との間に切り結んでいた意味の世界が剥がれ落ちていく。「私」はそういう危機を味わっていると言えるから、その時物書きとして「書くことがない」と呻くことは十分にありうる。こう考えると小説の主題は表現されたと言える。その点だけで考えれば「書くことがない」で終わりなのだが、そうもいかない。

実は、執筆依頼を引き受けたときの約束では八回連載だったので、上記の量では二ないしはは三回で終わりにはできないのである。引き延ばす必要がある。そのために子育ての報告として子育てにまつわるあれやこれやの出来事を父親の眼から見て書き加える作戦がとられた。ほとんどすべての回で子供たちのことが登場するのはそのためだし、読者たちを飽きさせないためにも巧みな戦術ではある。

実は、水増し作戦には他にもう一つ狙いがある。世界が遠く感じられるという「私」の実感を読者に納得してもらうことである。そのためには切羽詰まった状況の背景として人間関係の形成で「私」固有の事情のためそれがうまくいっていないことを匂わせなければならない。寧ろこの仄めかしのために多くのスペースが用いられている。毎回登場する子供との関係性の記述もその一つである。

実は、作家的な創作意図と、私信の中で語られる出来事・現実描写の間はうまく接続していない。むしろ乖離している。人間関係形成で躓いていることを一読して読み取れる読者は多くない。子育て話に目を奪われる方が自然だ。だから変な小説だと読まれて酷評されることにもなる。躓きについては本論でしつこく取り上げたので再論しない。

実は、奇態な妄想を書いた時、つまり「生命の道」という「私」にとって核心的な言葉を書き込んだ時、「私」の次元では私信としてこれで十分だ、だから「書くことはない」として終わりにすることもできた。しかしそれでは私信としての首尾が整わないだけでなく、作品としても半端なので、「……沢山だ」のフレーズが必要になってくる。妄想ではなくて、目が覚めた後の冷静な頭脳による現実の「私」についての明晰な結論なのだという一言である。

実は、このように読むことは、有島 freak としていささか鼻眞の引き倒しに陥っているという気がしないわけでもない。確かに有島的にテーマは深刻なのだが作品としては半端なのだ。

蛇足だが、この要約では本論で読解してみたことを結論の方から遡って書いてみた。首尾よくいったかどうかはわからない。